

グループ多摩虫飼育情報

ヒョウモンモドキの累代飼育

文責：

写真：



全般

ヒョウモンモドキの累代飼育法について述べるが、累代の過程で最も困難なのが幼虫での越夏、越冬である。これさえ克服すれば、交配、産卵、幼虫の飼育などは比較的

容易である。

更に、ウスイロヒョウモンモドキ、コヒョウモンモドキも食草など幾つかの点は違うが、概ね飼育法は類似である。

羽化成虫の交配

蛹からの羽化は他種同様、♂が先に羽化し♀が少し遅れる。羽化成虫♂は、交尾までに2～3日吹流しの中で運動させ、給餌して準備を整える。100円ショップで入手できる大型の洗濯ネットが吹流しとして使用でき便利である。軒下など雨が当たらない場所で、半分直射日光が当たり、半分が日陰になる程度の風通しの良い屋外に洗濯ネットをセットする。餌としてランタナの小型鉢植えをネット内に入れ、自分で吸蜜させると手が掛からない。1日1度ぐらいは、蜂蜜の薄い液などを蝶を手にとって給餌すれば完全である。

準備が出来た♂2～3頭を収容した吹流し内に、当日もしくは前日羽化した程度の♀1頭を入れて交尾を行わせる。♀には格別の準備は不要であるが、羽化後最低半日ぐらい静かに休ませたものを使用している。

♂の準備ができていれば直ぐに♀を追う挙動が見られる。♀の横に同じ向きに並んだ

♂が、尾端をU字型に曲げて交尾が成立する。早ければ見ている前で、遅い場合は半日ぐらいを要することもある。出来るだけ交尾の確認が出来る休日に行うように努めているが、出来ない場合も多く、その場合は♂の挙動などから成否を推定せざるを得ない。



交尾が成立したカップルは、静かに指に止まらせるなどして別の吹流しに移動させる。未交尾の他の♂が邪魔しに来るのを防ぐ意味と、複数の♀を使用して同時に交配を試みる場合の個体の識別にも必要である。

交尾は1時間弱から1時間半ぐらい続くことが多いが、時間の長短は首尾の成否にあまり関係ないようである。交尾を終えて自然に離れた♂は、まだほとんど痛んでおらず標本にすることが出来る。♂の数が少なく、累代に挑戦するか標本にするか迷う場

産卵

交尾後2日程度休養させた♀の腹部が大きく膨れていれば、産卵適期の印である。食草（私は採卵用にはタムラソウを愛用している）の鉢植えを前述の洗濯ネットに入れて、同様の置き場所にセットし、中に♀を放す。ネットは底が台の上に丁度届く高さに調節して吊るせば、ランタナとタムラソウの2鉢を収容しても底が抜ける心配が無く、寸法的にも丁度良いスペースである。産卵までに数日を要することもあるが、待てばやがて確実に産卵してくれる。卵は1枚の葉裏にびっしりと固めて生まれ、その数は200~400卵以上と非常に多い。その後もパラパラと産卵するが、最初の大卵塊が産卵数のほとんどと考えてよい。産卵時の♀は葉裏に静止して1~2時間の長時間を掛けて卵塊を形成するが、この時の♀はかなり神経質である。写真撮影のため接近

合にこの点は心強い。運動と給餌の後、再度交配用に使用することも可能である。

交尾後の♀は給餌してゆっくり休養させる。この際にも吹流しとランタナの鉢植えが再度活躍する。



したりすると産卵を中止して移動し、飛び立つこともある。

この産卵の際に特に中断も無いのに、始めから50、20・・・などパラパラと産卵し大卵塊を作らない場合、たいていは交尾の失敗を意味する。交尾未確認の場合は、この最初の産卵数に着目する。未交尾と分かれば、間に合えば再挑戦も可能であるから。

孵化から休眠（越夏~越冬）まで

卵の孵化までの期間は他種と比べて予想外に長く、20日から1月弱掛かることがある。長く孵化しないので未受精卵と諦めないように注意したい。卵が凹んだりせず、正常な形を維持しているなら受精卵の可能性が高い。

卵の期間での注意は、食害する虫類、乾燥、

過湿によるカビの発生などがある。害虫では夜盗虫、ナメクジ、ダニ類が大敵であり、夜盗虫に一晚で卵がついた葉っぱごと卵塊を食べられてしまう経験もした。対策は鉢植の土を清浄に保つことと、袋掛に尽きる。採卵に使用するタムラソウは、使用直前に植えられていた古い土を洗い落とし清浄な

土で植え直したものを使用するか、予めベランダなど虫が少ない環境に移動して育てたものを使用している。この場合でも、鉢ごと水中に沈めて半日間放置するなど使用前の害虫排除対策を行っている。

鉢植えの食草に産卵された卵であれば、食草に水を切らさぬ管理をすれば乾燥やカビの問題は心配ない。卵が生まれた葉を切り離して管理する（友人とやり取りするなどの）場合は、根付きの食草の葉に丸まらないようにピンなどで留めて霧を吹いたり、短期間なら葉の水差しなどで対応する。友人に卵塊を送っても孵化しなかった例が多いが、この湿度管理が問題と考えている。変化の無かった卵がわずかに褐色を帯びると、翌日辺りに幼虫が一斉に孵化する。後は3齢(?)で休眠に入るまで、良く知られたように糸を吐いて葉をつづり合わせた巣を作り、葉を移動しながら成長する。数が多く予想外に食草を食べるので、幾つかに分散した巣を別の食草に移すなどして管理する。この期間は約2週間強ぐらいと記

休眠幼虫の管理

全般で述べたように、この段階が飼育上の最大の難関である。夏、秋、冬にまたがる半年間を休眠幼虫で過ごす本種の、人工環境での湿度管理が大変難しいのである。

幼虫の性質は乾燥に比較的強く過湿に弱い。袋掛したネットに付着して休眠状態になった幼虫は夏越し管理が最も楽である。日陰で風通しが良く直接雨が当たる場所であれば、乾燥が続く時だけジョウロなどで袋の上から水を掛けてやるだけでよい。

枯葉をつづった巣の中や、地上の落ち葉の中に潜り込んだ幼虫は湿度管理が難しい。

憶する。この期間に袋掛しないと幼虫数がどんどん目減りするので注意が要る。写真撮影のために鉢植えを室内に持ち込み袋掛なしで飼育した際に気がついたが、振動などわずかの刺激で幼虫は糸にぶら下がって落下し、そのまま食草に戻れなくなる。数百の卵から出来た休眠幼虫は50以下に減ってしまった。

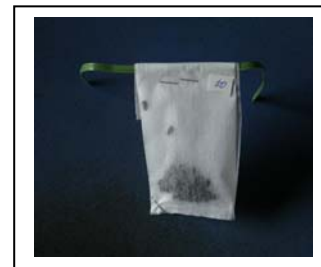


時期が来ると幼虫は摂食をやめ、適当な休眠場所を求めて集合する。



多数の幼虫が集団で糸を吐いて固まり、体を縮めて熊毛虫状態になり休眠に入る。鉢植・袋掛飼育の場合、袋の北側下部、袋の縫い目、食草下部の枯葉をつづった巣、鉢土上の枯葉の中などが多い。

幼虫の状態が見えない上、水をやり過ぎればカビが発生する。幼虫を巣から出して、小さなゴースの袋に詰めて、ネットに付着した幼虫と同様に管理すれば具合が良い。ネットに付着した幼虫も冬の始めごろに場所を変えて動くことがあるが、環境が変わって今までの場所が快適でなくなった証拠である。対策として、秋口から幼虫を取



り出して冷蔵庫で管理する方法がある。タッパーウェア中にティッシュペーパーを 5mm～1cm の細幅に短冊状に手で裂いたものをふんわりと詰め、わずかに湿度を持たせた状態の中に幼虫を放し、冷蔵庫で保管する。ティッシュペーパーは殺菌処理が施されていて、この程度の湿度であればカビを呼ばない。清潔な容器の使用、カビを呼ぶ糞や脱皮殻などを持ち込まないことが重要である。この手法は多摩虫の合宿をペンシ

ョン・ファーブルで行った際、宿の御主人の山本さんから教えていただいた方法である。山本さんはこの方法で毎年多くの幼虫を成功率ほぼ 100% で越冬させておられる。植木鉢に半分程度赤玉土を入れ、その上に枯葉や藁くずなどを敷いて幼虫を放しゴースで袋掛けして家の北側、雨の当たる場所に放置するやり方を何回か試みたが、成功したりしなかったりでまだ要領が分らない。

春の目覚め

東京地区で 2 月末から 3 月初め頃、越冬してきた幼虫が自然に目覚め、袋掛した鉢の中を歩き回る。別に用意した食草の芽吹きにあわせて幼虫を拾って移してやれば自然に摂食を開始する。この際に使用する食草にはアザミ類が好適である。前年株の根際でロゼット状で冬を越した新芽がこの頃にはかなりの大きさがあり、その後の成長も速いからである。タムラソウの芽出しは遅くこの頃は芽はまだ小さい。

冷蔵庫越冬の場合は、自然に目覚めることは無いので、人工的に覚醒させる必要があ

る。野外管理幼虫の目覚めと同じ時期に冷蔵庫から出しても、冷蔵庫幼虫が本格的に覚醒し摂食を始めるのは 1 月ぐらい後になる。この間幼虫は日向ぼっこ、休眠、少し食草をかじるなどを繰り返し、だらだらと時間を過ごす。この間に食草が生長して幼虫の居る鉢土の表面に日が当たらなくなると、幼虫の覚醒は頓挫してしまい、いつまでも起きずそのまま死んでしまったりする。早めに取り出して休眠を覚ます必要があり、越冬管理が楽な反面、覚醒の手間が掛かるのである。

成長と蛹化

本格的に摂食を開始すれば、飼育は 99% 成功である。あとは良質の餌を十分与え、日光浴が十分出来る置き場所で飼育できればベストである。私はアザミの鉢植に袋掛けで飼育している。これらは必須条件ではないが、累代用の元気な成虫を作るためには是非心掛けたい。終齢幼虫は思いのほか大食である。蛹は袋掛したネットや支柱、食草の葉裏などに下垂し、蛹の大きさと雌

雄の判別は比較的容易である。



食草について

食草はタムラソウとアザミ類である。アザミ類は種類が多く種の同定も定かに知らないが、ヒョウモンモドキの飼育に適したものは葉が大きくて柔らかく、棘がきつくないものが使いやすい。私は広島での食草の中心となっているキセルアザミと、関東で入手できる春先に葉が赤みを帯びた大型種（ノハラアザミ？）を使用している。

タムラソウ、アザミ両種とも2年草であり、親株から株別れもしくは実生で株の更新・繁殖が進む。実生1年目は株の大きさが小

さく、2年目で大きく育ち開花する。野外で食草を採取する場合、花の咲く2年株を採るとその年は使えるが翌年はその株自体は使用できないので注意が要る。両種とも秋に採取した種を春に播き1年育成すれば、翌年には手ごろな大きさの株が必要なだけ手に入るので、累代には実生・育苗が適している。